

恩院の菊の間、鷲の間(尙信?)の如き不統一の陥
缺は曝露されないものである。

以上述べた處に依て三回の京都見學の大要は説
き盡された。要するに桃山襖繪研究の第一歩に過
ぎない。尙各寺院の作品に就て一々論及すべきで
あるが、それは今後の研究に俟つこととして茲に

象

文學博士 藤 田 豊 八

は記さない。又記録に依る研究、畫題、描法、色
彩等の研究はすべて他日を期することとし、且同
好諸氏の研究にも深く期待したのである。

桃山襖繪の研究に就て上記諸寺院其他關係諸方面の諸
氏が、少からぬ便宜を與へられたことに對し深い感謝
の意を表する。
(十三年八月二十五日)

象なる動物の支那人に知られたのは極めて古

い。いふまでもなくこの文字はその象形で、即ち
『説文』に之を解して「南越大獸、長鼻牙、三年一
乳、象耳・牙・四足・尾之形」といつて居る。而し

て『周易』の出來る頃には已にこの文字の第二義た
る「形象」の意にも用ゐられ、その繫辭には之を解
して「象也者像也」といつて居る。

さてこの動物の名稱は Indo-Chinese 語で、その
東支なる支那語及び 「E. 語」に於てのみ共通であ
る。即ち Siam 語で *tau Shan* 語で *sai* 又は *tsan*

Khamti 語で *rah* / Laos 語で *tsah* / Paun 語で *sah* /
Ahom 語で *wah* 廣東語で *tsah* 客家語で *sion* 福建

語で *sion* 北支那語で *sion* 等であるが、その西支に
は共通の語がない。即ち西夏人は之を暮といひ、

西藏人の如き、之を *gah-tu* 若くは *gah-pote* (大
牡牛) といひ、又た之を *ba-rah* (*bal shah* から) 即
ち泥波羅牛ともいひ、この動物の特名はないので
ある。すればこの動物の名稱は Indo-Chinese 人が
東西兩支に分離した後¹に起つたのであつて、その
以前に在ては、彼等はこの動物を知らなかつたも
のと見ゆる。而してその名稱より推して、西藏人
のこの動物を知つたのは、そが印度と交通の後な
ること略ぼ疑なく、東支に在つても、予輩はその
位置より推して、漢族はこの名稱を *夏* 族に學び、
夏 族は之を印度より承けたのではないかと想ふの
である。實際支那の所傳は概ね予輩のこの所想を
暗示して居り、印度文化の間接若く直接に支那に

波及したのは、佛教渡來より久しき以前に在つた
といふ一傍證とするに足らうと想ふ。

二

支那の古傳説中、古來史實として一般に信せら
るゝものは『尙書』堯舜のそれである。この古傳説
中に「象」なる文字は舜の異母弟の名として現はれ
て居る。所謂「象傲る」といふのがそれである。而
して『孟子』(卷九)萬章上篇の傳ふるところに依る
と、舜の帝となるや之を有庠に封じたといふ。庠
の音は鼻であつて兩字は相通である。故に『史記』
及び『帝王世紀』には之を有鼻に封じたといつて居
る。この有鼻につきて『史記正義』には『括地志』等
を引き、種々の擬定を試みて居るが、要するに定
説はない。こは固より然るべきで、象といふ名か
ら有鼻に封じたといふ傳説が起つたので、かゝる
地名の穿鑿の如き、いふまでもなく無用である。

印度に於て Sanskrit では象を Gajah といひ、この語は南洋一般に通用せられて居るが、その群を離れて孤棲し、概ね獍猛であつて旅人に危険なるものを、Williamson 氏に依るゝ Bengal 地方で、之を Saun 即ち San [Hind. Saun, Skt. Shanda] と呼ぶといふ。尤も説文にも「象」の外に「豫」字を挙げ「象之大者、賈侍中説、不害於物」といつて居るのを視ると、Skt の Gajah はこの豫に當り、所謂「象」は「害於物」の象を謂つたやうにもある。従つて Bengal 地方の Saun 即ち San と同義であるやうにも見えるのである。

予輩は固より舜象の傳説が印度から起つたと斷言するものではない。しかも「象傲る」と Jambh. 地方の Sin, Sanskrit の Shanda との間に極めて微妙なる類似のあることを看過するを得ないのである。況んや孟子(卷八)離婁下篇に依ると舜は東夷の人だといひ、又たそが鳴條に卒したといへる頗る東

南蠻夷に縁あるを想はしむるものがあるのである。鳴條の所在は固より明瞭ではない。しかも鄭玄は「地在南夷」といひ、史記に依ると、そが南巡狩りて蒼梧の野に崩じ、江南九嶷の山に葬つたといへば、舜が南方夷蠻の地に崩じたとの傳説は當時一般に行はれたものと見える。而して舜がその崩後までも象に縁あるは奇妙である。即ち後漢の頃には舜の葬後、象之が爲めに田を耕したといふ傳説は、頗る廣く行はれたものやうで、王充の論衡(卷四)書虚篇には、「傳書言舜葬於蒼梧、象爲之耕、禹葬會稽、鳥爲之田、……考實之、殆虚言也、……實者蒼梧多象之地、會稽衆鳥所居、……象自蹈地、鳥自食草、土獸草盡、若耕田狀云云」といつて居る。要するに舜象の傳説には、どこまでも南方的即ち印度文化的の臭味あるを感せざるを得ないのである。

更に南方的即ち印度文化臭味の濃厚なるは商人（般人）である。『呂氏春秋』（卷五）古樂篇に依ると「商人服象爲旂於東夷周公遂以師逐之至江南乃爲三象以嘉其德」といつて居る。高誘は之に注して「三象・周公所作樂名」といつて居るが、梁玉繩もその『呂氏校補』に於ていつて居る通り、他書には當見らない。しかもかゝる傳説が戰國時代に行はれたことは、之に類似の傳説が『孟子』（卷六）滕文公下篇にも見えて居るので知れるのである。即ち「及紂之身天下大亂周公相武王誅紂伐奄三年討其君驅飛廉於海隅而戮之滅國者五十驅虎豹犀象而遠之天下大喜」といつて居る事である。いふまでもなくこれは周公の東征を謂ふのであつて、商人は所謂「殷の頑民」であり、東夷は當時淮水の流域に據つて居た淮夷であり、飛廉

は紂の臣名、奄は國名で淮夷の北に在つたといふが、想ふに淮夷中の最も強大なる部族であつたのであらう。而して『孟子』に「驅虎豹犀象而遠之」といつて居るのみでは何等の奇もないが、『呂氏春秋』に「商人服象爲旂於東夷」とあるは創聞である。こは般人が象を馴服して戰爭に用ゐたことを意味し、かゝる事例は支那古代に於て極めて稀でたゞ『左傳』に一例あるを見るのみである。即ち同書（卷五四）定公四年に楚王の吳人に破らるゝや「鍼尹固與王同舟王使執燧象以奔吳師」といへるがそれである。賈逵は之に注して「燧火燧也象象獸也以火繫其尾使奔吳師驚却其衆使王得脫」といひ、杜預もその説を用ゐて居る。こは明に象を戰爭に用ゐたのであるが、しかもこの唯一の例すら、南蠻楚人の事であつて、純然たる北方漢族の事ではないのである。いふまでもなく象を戰爭に用ゐたのは印度人に始まり、後に至りその

文化に浴した南海諸國に廣く行はれたのである。されば『史記』(卷一二三)大宛傳に依れば、前漢の時張騫も身毒の特異なる風俗として「其人民乘象以戰」といふのを舉げて居り、前に引いた「燧象」の孔穎達の疏にも「楚近南邊故有此象」といつて居る。尤も『白帖』(孔白六帖卷九七)「王莽與世祖戰昆陽驅群象」といひ、前漢末には支那にも此風俗があつたやうに傳へて居るが、正史には見えでない。即ち『前漢書』(卷九九下)王莽傳には昆陽の戰を叙してたゞ「(王)邑多齋珍寶猛獸欲視饒富以怖山東……大衆崩壞號譟虎豹股票」といつて居るのみである。従つて『白帖』の所傳はさまで重を置くには足るまいと思ふ。然るに『呂氏春秋』の所傳、即ち戰國時代の所傳に依ると、般人は已にかゝる風俗を有つて居たといふ。元來般人は單にその位置の上からのみ視ても、淮夷とは特種な關係を有つて居たやうである。成湯の都は毫で、即

ち今の河南省の偃師縣であり、又た後に至り盤庚の移つた般は、後の般墟で、即ち今の河南省の湯陰縣である。而して周が般を滅じて後も、その子孫は宋に封せられて「頗收般餘民」といはれて居る。宋は商丘に都し、即ち今の河南省の歸德府である。されば般人は淮夷と壤地相接した譯で、たとへその王室は漢族であつたとしても、その人民は極めて淮夷に近いものであつたらう。而して『左傳』の傳ふる楚人の「燧象」と同様、彼等の風俗が頗る南方的であつて、或は楚人と同様、直接か或は間接に、印度文化の影響を被つて居たのではなからうかと思はるのである。般人が鬼を尙ふといふ所傳も彼等が極めて南方的の人民であつたとして始めて説明がつくのである。

固より『呂氏春秋』所傳の孤證、特にそれが戰國時代の所傳たるに於て、遙かに上世なる般代の風俗を推斷するは、餘りに大膽である。しかも予輩は

『呂氏春秋』の「商人服象」の紀事が、その行文の上より視て、決して後世の攙入にあらざるを信ずるが故に、少なくとも春秋戰國時代の漢人は已に印度の文化に就きて或種の知識を有つて居たといつても、大なる支障はなからうと思ふ。而して彼等にして已に印度に起源せる服象の智識を有つて居たとせば、春秋戰國時代に蜂起した幾多の雜說中、その源流を正當に支那思想に求め得ずして、却て満足に印度思想に求め得べきものは、之を印度文化の影響と視ても、殆ど不都合ではないやうに想ふ。

四

いふまでもなく象に最も有用なるは、その齒即ち牙であつて、支那人の之が利用を知つたのも随分古い。例せば『史記』(卷三八)宋世家に「紂始爲象箸箕子歎曰、彼爲象箸、必爲玉楮、爲楮、則必思

遠力珍怪之物、而御之矣、與馬宮室之漸、自此始、不可振也」とある。これは『韓非子』などから採つたらしく即ち(卷七)「昔紂爲象箸、而箕子怖、以爲象箸必不加於土、則必將犀玉之楮、象箸玉楮、必不羹菽、必旄象豹胎、旄象豹胎、必不衣褐、而食於芻屋之下、則錦衣九重、廣室高堂、吾畏其卒、故怖其始、居五年、紂爲肉圃、設炮烙、登糟丘、臨酒池、紂遂以亡、故箕子見象箸、以知天下之禍」といふ紀事が同書(卷七)喻老篇に再見して居る。この紀事にして信すべくば、殷紂の時既に象箸は作られたことになるのであるが、これは固より戰國時代の雜說であつて、史實として信するには餘りに時代が隔り過ぎる。しかも韓非子にかく傳ふるからには象箸の作られたのが戰國時代より遙かに以前に在つたといふこと、略ぼ疑ふの餘地がないのである。さるにても殷人と象との關係の極めて親密なるは注意するに足るものがあらう。

周代に入り、象牙が玉と同様に重用せられたことは幾多の例證がある。『毛詩』（卷四）邶風君子偕老篇には「玉之瑱也、象之瑳也」と見え、同（卷九）魏風葛屨篇には「好人提提、宛然左辟、佩其象」^帝と見え、毛傳に「掃所以摘髮也」とあれば櫛の類であらう。されば象牙の櫛は周時已に使用せられて居たのである。又同（卷二二）小雅采芣篇に「予髮曲局」とある鄭箋に「禮婦人在夫家、笄象笄、今曲卷其髮、愛思之甚也」と見え、その言必ず依るところがあらうから、周時已に象笄もあつたものとしてよからう。なほ同（卷一七）小雅采芣篇に「象弭魚服」といふ句があるが、毛傳には「象弭、弓反末也」とあれば、象牙を以て弓の末弭としたものと見ゆる。

降りて戰國時代に至りては、南方楚人の如き、象牀すら作つたものと見え、『戰國策』（卷十）齊策に「孟嘗君出行國至楚、獻象牀、郢之登徒、直使送

之、不欲行、見孟嘗君門人公孫戊曰、臣郢之登徒也、直送象牀、象牀之直千金、傷此若髮、漂賣妻子、不足^三以償之、足下能使僕無行、先人有寶劍、願得獻之、公孫曰、諾云々」といふのが見えて居る。郢はいふまでもなく楚國の都、今の荊州沙市で、「髮漂」は『通鑑』には「毫髮」に作つて居る。後世象牙の席、象牙の簟などを傳へて居るが、已に象牀すら作られたといへば、かゝるものも當時已に有つたらうと想ふ。又た屈原の離騷に「爲余駕飛龍兮、雜瑤象以爲車」といふ句がある。象は王逸の注せる如く象牙である。これは固より詞人空想であるが、當時瑤（美玉）象（象牙）を雜へて裝飾した車があつて、之が詞人の思想に反映したのかも知れない。周時かく象牙製作の發達につれ、之が製作に一定の名稱すら出來たやうである。即ち『毛詩』卷五）衛風淇奥篇に「如切如磋、如琢如磨」といふ句があるが、毛傳には「治骨曰切、象曰磋、玉曰琢

石曰「磨」と見えて居る。『爾雅』(四卷)釋器に「金謂之鏤、木謂之刻、骨謂之切、象謂之磋、玉謂之琢、石謂之磨」といつて居るのも同様で、郭璞は之に注して「六者皆治器之名」といつて居る。即ち周時已に象器を治するに「磋」といふ一定の名稱も出來て居たのである。

而してかく種々の器物に製作せられたる象牙が、古代から東夷南蠻から輸入せられたといふことは最も注意に値すると思ふ。即ち『尚書』禹貢の如き、南方揚州の貢物として「齒革羽毛」を擧げ、孔安國は之に注して「象齒犀角鳥毛旄牛尾也」といひ、又た同荊州の貢物にも「羽旄齒革」を擧げて居る。固よりこの禹貢の編成が夏禹當時のものでないことは略ぼ疑ないが、さればとて春秋戰國時代を下るものではないだらう。而してかゝる所傳は、古代に於て長江流域に象犀旄牛などの棲息し、若くはそが此等地方を經由して黃河流域に移

入せられたといふこと證明するものである。特に『毛詩』(卷二九)魯頌泂水篇に「憬彼淮夷、來獻其琛、元龜象齒」といふ句がある。この泂水篇は詩序に據ると、「頌僖公能修泂水也」とあれば、この詩は魯の僖公(西紀前六五九—六二七)の時の事を詠じたものである。禹貢には單に「齒」とあるが、こゝには明に「象齒」とある。而して東方に國した魯人すら、紀元前七世紀の頃、なほ象牙の供給を淮夷に仰いだことが知れる。これはさきに引用した『孟子』及び『呂氏春秋』の所傳と相照して頗る趣味あるのを覺ゆるのであるが、さればとて周初の頃まで徐淮地方に象犀が棲息して居たか否かは固より疑問である。たゞ『孟子』及び『呂氏春秋』の傳

ふる、周公が此等の猛獸を江南に逐うたといふ傳説より推し、少なくとも周代以後には、此等地方に此等の猛獸が棲息して居なかつたといふことは斷言して支障ないだらう。しかも魯頌になほ

かゝる所傳ある以上、『尙書』の所傳と相照らし、古代から周代まで象牙その他を黃河流域の漢族に供給したのは、徐淮地方、及び江南地方の蠻夷であつたこと、略ぼ疑はないのである。従つて予輩はこの動物の名稱たる *Saṅ*, *ṣaṅ*, *Siaṅ* 等が、もと此等蠻夷の言語（恐らくは *Tai* 族の言語）であつて、漢族はこの名稱を彼等より承け、而して此等蠻夷の此動物に對する名稱は、殆ど *Sanskrit* の *Shanda* (*Hind.* の *Sand*) に縁あるものであらうと信するのである。

なほ漢人の古説にも予輩の右の想定を裏書するものがある。さきに已にいつた如く、周易には象字を已に像の義に用ゐて居る。この字を「法象」「形象」などに用ゆるは皆なこの義である。いふまでもなく動物の名として用ゆるがその第一義で、

形象の意に用ゆるはその第二義である。『韓非子』（卷六）解老篇にはこの第二義を汎生した所以を解

釋して、「人希見生象也、而得死象之骨、案其圖以想其生也、故諸人之所以意想者、皆謂之象也」といつて居る。これは固より俚説で、段玉裁がその『說文解字』注にいへるが如く、象に像の義の出来たのは「聲に於て義を得たので、字形に於て義を得たのではない」。換言すれば意想するものをも *Siaṅ* といふからこの象字を借り用ゐたのである。たゞ韓非の所説に依り、予輩は戰國の末年に於てすら、漢人は殆ど生象を睹たことが希であつたといふことを知り得るのである。即ち彼等は象牙は之を利用するが、すべて之を東南の蠻夷に仰ぎ、生象そのものは睹たことはなかつたやうである。従つてこの動物の名稱を漢族の固有なる言語とすることは到底出來ない筈である。

五

支那に在ても、その南方に於ては、遙かに後世

に至るまでこの動物の棲息して居たこと、幾多の記録に徴して略ぼ疑ないのである。その著明なる一例を擧ぐると、唐の劉恂の『嶺表錄異』に「廣之屬郡潮循州多野象、潮循人或捕得象、爭食其鼻、云肥脆尤堪炙、或云象肉有十二種、象膽不附肝、隨月轉在諸肉、楚越之間、象皆青黑、唯西方弗林大食多白象、又雲南豪族家、多蓄象、負重致遠、如中國之牛馬、漢使至其國、輒飾象以金羈、皆合節奏云々」と見えて居る。『廣之潮循州』といへば、當時廣州都督府所屬の潮州潮陽郡、循州海豐郡を謂ふのであるが、潮州は大體今の廣東省の潮州、循州はその惠州である。されば此等地方には唐時なほ野象群を成して居たものと見える。さきに引いた『論衡』の所傳にして誤なくば蒼梧即ち今の梧州なごも後漢時代に於ては、亦た同様であつたやうである。なほ『錄異』傳ふるどころに依れば、所謂「楚越之間」にも當時青黒の象が居たやうで、さす

れば今の湖南北浙江福建などに、この動物が出没したものと見える。雲南は固よりいふまでもなく、漢代に在つても同様で、『後漢書』(卷一、一六)西南夷傳には後に永昌郡となつた地方の哀牢夷の土産として犀象を擧げて居る。こは固より然るべき此等地方から馬來半島にかけて今でも多象の地と稱せられて居るのである。なほ更に古代に遡りて『爾雅』(卷六)釋地九府條には「南方之美者、梁山之犀象焉」と見え、郭璞は之に注して「犀牛皮角、象牙骨」といへば、固より生象を謂つたものではないが、生象がその地に棲息して居るからその牙骨を出すとも解せられやう。たゞ郭璞は「梁山」に關して何等説明してない。或は之を一の山名と解するものもあるが、しかし廣く西南梁州の山と解する方が穩當でもあり、事實にも叶ふやうである。いふまでもなく梁州といへば今の雲貴四川の地方を指すのである。又た『楚辭』(卷三)天問篇に「靈

蛇吞象、其大如何」といふ句がある。之と相似たるものは、『山海經』(卷十)海内南經に「巴蚺食象三年而出其骨、君子服之、無心腹之疾」といひ、又た同(卷一八)海内經に「西南有巴國、…又有朱卷之國、有黑蚺、青首、食象」といつて居ることである。

而して郭璞は「有黑蚺云々」に注して「卽巴蚺也」といつて居る。巴國は今の四川重慶地方であつて、古代此等地方に象の棲息して居たらうとは推測出来るが、しかも楚國の屈原が「靈蛇吞象、其大如何」と天に問ふたところを視ると、かゝる事實は楚人さへ疑ふところで、多分印度などから傳はつたものであらう。即ち希臘人の傳ふる、牛を呑むといふ印度の大蛇と相似たるものがあるを見るのである。

かく支那の古代に於て、この動物がその西南一帶に棲息し、若し『孟子』『呂氏春秋』の所傳にして信すべくば、周代以前に在つてはそが徐淮地方に

すら群居したやうであるが、しかも漢族は漢代以前に於て、殆ど直接にこの動物を知らず、その重用した象牙は春秋以後、確實なる記録に依れば、皆な之を東夷南蠻から移入したのであること、以上説く所の如くである。而して戰國以前に在つては彼等はこの物を徐淮若くは長江流域の蠻夷から獲たやうであるが、戰國末年から以後は概ね之を南海から獲るやうになつたものと見える。固より徐淮及び長江流域のそれも、或は海路南越から來たものもあつたらうが、記録の徵すべきものがないから、何ともいふことが出來ぬ。想ふに漢族の勢力、漸を逐うて東南に擴大するに及び、象牙の移入者は、象と共に次第に南方に驅逐せられたものだらう。即ち『荀子』(卷五)王制篇には已に「北海則有走馬吠犬焉、然而中國得而畜使之、南海則有羽翮齒革、曾青丹于焉、然而中國得而財之」といつて居り、所謂「齒革」は楊注にもいふが如く、

「象齒」及び「犀兕之革」である。たゞこゝに所謂「南海」は『北海』に對し「南方」といふほどの義であらうが、『淮南子』(卷一八)人間訓の如きに至つて

は、秦の嶺南經略を以て「越之犀角、象齒、翡翠、珠璣」を利せんが爲めださへいつて居る。固より秦の嶺南經略はかゝる經濟的原因からのみ起つたのではなからうが、實際南越の都番禺即ち今の Canton は東方亞細亞に於ける此等商貨集散の中心であつて、漢代の記録より推しても、しか信せざるを得ないのである。即ち『史記』(卷一二五)貨殖列傳に「九疑蒼梧以南、至儋耳者、與江南大同俗、而揚越多焉、番禺亦其一都會也、珠璣、犀、瑇瑁、果布之湊」といつて居る。尤もこの文中「犀」字の下に「象」字を脱したものらしく、『漢書』(卷二八下)地理志に粵地を概説して「處近海、多犀象、毒冒珠璣、銀銅、果布之湊、中國往商賈者、多取富焉、番禺其一都會也」といつて居るのは大體『史記』の文に據つた

もので、しかも「犀」字の下に「象」字がある。これは後漢時代と同様で、従つて『說文』に象を解して「南越大獸」といつたのである。

なほ張騫西使以來、漢人は始めて「其人民乘象以戰」の身毒あるを知つた。しかも馴象を目睹したのは、實に武帝元狩二年に始まつたやうである。即ち『漢書』(卷六)武帝紀に依れば、此年に「南越獻馴象能言鳥」とあり、應劭は之に注して「馴者教能拜起周章、從人意也」とある。繰返しいふが象を馴らしたのは印度に始まり、その文化を被つた南海諸國に及んだのであること、殆ど疑ふことのない事實である。然るに春秋戰國時代の所傳に、般人にこの事があり、楚人に亦この事があつたとせば、少なくとも春秋戰國時代に印度の文化は、遠く淮水流域及び長江流域に、及んで居たと視なければならぬのである。

六

以上の考説にして幸に大謬がないとすると、春秋戰國時代に於ける支那の思想界に、印度文化の影響が絶對にないとはいへないだらう。そはなにかも知れない。しかもあり得べき位置にあつたともいひ得やう。要は孰れか満足に當時蜂起したある特種の思想を説明し得べきや否やに在る。

その一は老子の無爲哲學である。佛教の支那に入るや、その教義の頗る老子の所説と相似たるものがあるが故に、楚王英の如き、老子と共に之を尙んだことは『後漢書』(卷七二)のその傳に「晚節更喜黃老、學爲浮屠」といひ、永平八年、明帝が王に報じた詔にも「楚王誦黃老之微言、尙浮屠之仁祠」といふ句があり、殆ど老佛を同列に視て居る。又た桓帝も同様であつたと見え、『後漢書』(卷六〇下)襄楷傳にその上書を載せて居るが、その

うちに「又聞、宮中立黃老浮屠之祠」といひ、特に「或言、老子入夷狄爲浮屠」とさへいつて居る。而して章懷はこの「或言」に注して「當時言也」といつて居るは、然るべきであるとする、當時已に「老子西關を出た」といふ所傳に附會して「老子化胡」の説も有つたやうである。而してこの説はやゝその形を變じて、三國時代にも行はれたと見え、『魏志』(卷三〇)に引ける魚豢『魏略』に「浮屠所載、與中國老子經相出入、蓋以爲老子西出關、過西域之天竺、教胡浮屠、屬弟子云云」といつて居る。即ちこゝには浮屠が老子の弟子といふことになつて居る。而してこれが晋代に至りて遂に道士王浮の『老子化胡經』となつたのである。

かく漢人をして佛教東漸の初から、その類似を認めしめた老子の思想には印度文化の影響がないであらうか。はた支那の上世の思想に老子の思想を導き出すに足る萌芽が存在したであらうか。漢

書(卷三〇)藝文志には『伊尹』『太公』『辛甲』『鬻子』『管子』等と共に之を道家と名づけ「道家者流、蓋出於史官、歴記成敗存亡禍福古今之道、然後知兼要執本、清虛以自守、卑弱以自持、此君人南面之術也、合於堯之克讓、易之謙謙、一謙而四益、此其所長也、及放者爲之、則欲絶去禮學、兼棄仁義、曰獨任清虛、可以爲治」といつて居る。しかし何人も「成敗存亡禍福古今の道を歴記し」たればとて、此から老子の道が出やうと思はぬであらう。「堯の克讓・易の謙謙」は儒家も之をその根本教義の一とするではないか。老子の老子たる特色は、人爲の繫縛を去つて無爲の自然に返らんとする點に在る。換言すれば意志の世界を棄て、無意志の境地に遊ばんとする點に在る。『漢書』の所謂「禮學を絶去し、兼ねて仁義を棄てんと欲する」放者たる點に在る。かゝる思想の傾向は之を所謂史官にもはた易の教にも求むることは出来なからうと思ふ。

老子は『史記』(卷六三)に依れば、周の守藏室の史であつたといふ。藏室とは藏書室である。『漢書』の道家史官説もこの邊から出たものだらう。兎も角そが國の藏書室の史であつたといへば、當時漢族文化を體得せる第一人者と稱することが出来るやう。従つてその文化の得失の何の邊に在るかを識別するの判斷力も有つて居たものとも見える。況んや周末政治上及び社會上の混亂を目撃せるに於て、「その人と骨と皆な已に朽たる」禮樂仁義の第二次原理の頼むに足らざるを悟つたやうである。而してなほ史記に依れば、老子は楚の苦縣の人だといふ。楚といへば予輩は象に縁深き南蠻といふことを連想せざるを得ない。特に春秋時代已に印度文化の影響を被り、この動物を戦に用ゐたることあるに想到せざるを得ない。たゞ苦縣は今の河南省の鹿邑で、もと陳に屬したが、春秋の時楚・陳を滅ぼし、楚に屬したといふ。されば老

子の生地は淮水流域に在つた筈で、「商人象を服して晝をなした」と傳へはた元龜象齒を魯に來獻したと傳ふる准夷と、さまで相隔たらざる處であつたのである。

若夫れ莊子に至りては所謂「放者」中の「放者」であつて一層印度思想に類似せるもの。特に老子に得て更に之を高調せる輪廻説の如き、その淵源を印度に求むるの最も至當なるを想はしむるものがある。彼亦た老子と均しく博識を以て聞え、『史記』（卷六三）のその傳には「其學無所不闢」といつて居る。當時若し印度思想の片鱗だに移入せられ居たらんには、その眼光に映せずして已まざるべきは老子と同様であつたらう。而して『史記』には「莊子者蒙人也」といひ、『索隱』に依れば劉向『別錄』には「宋之蒙人也」といつて居るといふ。宋はさきにいつた如く商邱即ち今の歸德府に都し、蒙は漢時の蒙縣で、その附近に在つて杜預に依れば

此地に箕子の家があつたといふ。『史記』卷三八宋世家集解）而して宋は商人子孫の國せるところで、その人民は頗る准夷に近く、印度文化の影響比較的濃厚であつたことはさきに縷述した通りである。『尚書』及び『史記』の傳ふるところに依れば洪範は箕子の周武に傳ふるところだといふ。こは殷代文化の結晶である。五行の説はこゝに一定の形を得、支那數千年の人心を支配したのである。而して印度文化の影響比較的濃厚である殷人箕子に出たとすると、洪範特に五行の説を印度文化との間に何等かの關係はなからうか。予輩はこゝに或種の疑惑を懷かざるを得ないのである。固よりかゝる問題を解決せんには、更に詳審細密なる考覈を要し、予輩はこゝにその端緒を啓いたのに過ぎないことは言ふまでもない。

最後に予輩は更に讀者諸君に向つて提供せざる可からざる一問題がある。それは『孟子』卷二上「梁惠王下篇」に「昔者齊景公問於晏子曰、吾欲觀於轉附朝舞、遵海而南、放於琅邪、吾何修而可、以比於先王觀也、晏子對曰、善哉問也、天子適諸侯曰巡狩、巡狩者、巡所守也、諸侯朝於天子曰述職、述職者、述所職也、無非事者也、春省耕而補不足、秋省斂而助不給、夏諺曰、吾王不遊、吾何以休、吾王不豫、吾何以助、一遊一豫、爲諸侯慶、今也不然、師行而糧食、飢者弗食、勞者弗息、暵暵胥譏、民乃作慝、方命虐民、飲食若流、流連荒亡、爲諸侯憂、從流下而忘反、謂之流、從流上而忘反、謂之連、從獸無厭、謂之荒、樂酒無厭、謂之亡、先王無流連之樂、荒亡之行、惟君所行也、景公說、大戒於國、出舍於郊、於是始興發、補不足、召太師曰、爲我作君臣相說之樂、蓋徵招角招是也、其詩曰、畜君何尤、畜君者好君也」とある事である。いふまでもなく、こは君の民とその樂を共に

すべきを説いたのである。而して「吾欲觀於轉附朝舞、遵海而南、放於琅邪」といへるもの、海濱に遊樂せんと意なる事は明瞭であり、又た「琅邪」の齊の東境海上の邑名若くは山名なることも亦明瞭である。たゞ「轉附朝舞」とは何か、趙岐は之に注して「轉附朝舞皆山名也、又言朝永名也」といひ、何等確據あり確信あるの言ではないやうである。孫奭の疏に「正義曰、云轉附朝舞皆山名、今案諸經並未詳據、梁時顧野王釋云、澠水名、出南陽、恐悞澠爲舞、他並未詳」といへる、之を「未詳」とするは正直でよいが、舞を南陽に出づる澠水の悞とするは、「朝水名也」といへる趙注と共に附會の甚だしきものである。實際諸經は固より、秦漢時代この邊を遊歴した秦始皇武の行程にも、『史記』に相當詳細に記述せられて居るに拘らず、かゝる山名若くは水名、はた地名は見當らないのである。而してこの景公晏子の問答は唯に『孟子』に見ゆるのみ

でなく、『晏子春秋』(卷四)内篇問下第四にも見えて居て、大體の意味は同様である。たゞ『晏子春秋』には「轉附朝舞」を「轉附朝舞」に作つて居て、孟子と同様だが、王念孫讀書雜誌(六之一)に「念孫案群書治要戴此文本作吾欲循海而南至於琅邪續漢書郡國志注亦云齊景公曰吾循海而南今本吾欲下有觀於轉附朝舞六字循海作尊海皆後人以孟子改之」といへば、或はこの書には「觀於轉附朝舞」六字はなかつたかも知れぬ。しかし支那人の引用には、往々原文を節略し、讀み難きに於て特に然るが故に、必ずしも『晏子春秋』の原文にこの六字がなかつたと斷定する譯にはゆかぬ。又た『管子』(卷十)戒第二十六に此と同様のことが桓公と管仲との問答として載せて居る、即ち「桓公將東游問於管仲曰我游猶軸轉斛南至瑯邪云云」といつて居るのがそれである。尹注には「我游猶軸轉斛」を解して「言我之遊必有所濟猶軸

之轉載斛石」といつて居るが、附會の説で固より採るに足らない。第一これでは下文と意義が相應せぬのである。之に對して較々明快なる解釋を下したのは讀書雜誌(五之五)に見ゆる王引之の説である。曰く「猶讀爲欲古字猶與欲通有注軸當爲由由轉二字相連寫者遂誤加軍旁矣轉斛當爲轉斛丁氏升衢曰孟子轉附寰宇記引齊都賦晏子春秋並作轉斛魚與角付與斗均形近而譌案丁說是也。斛字右畔之付與隸書斗字作什者相似故譌爲斗我游猶由轉斛南至於琅邪言我之遊也欲由轉斛之山南至於琅邪與孟子吾欲觀於轉附朝舞遵海而南放于琅邪文義正同尹注不能釐正而曲爲之說非也」とたゞ「轉斛」を轉斛に還元したのは至當であるが「游猶軸」には誤脱があるやうである、なほ轉斛を山といふのは獨斷で、かつその何山なるやも不明である。

さて轉の音符は專で、專の上聲とも、その去聲

ともいはれて居り、止菟の切とも、株戀の切ともいはれて居る。朝の古文は晁で直遙の切だといふ。されば單に「轉附」(轉鮒)二字の名ならんには、或は之を「之罘」と視ることも強ち出来ないこともないやうだが、しかも「轉附朝儻」は一語のやうで、且つ「觀於轉附朝儻」といへるは「轉附朝儻」に觀覽を樂まんとすの意のやうである。予輩はこの「轉附朝儻」の四字が如何にも Jambu-dvipa (diceo, diu) と音聲に於て相似たるに驚かざるを得ない。若し夫れ春秋時代に於て、江南吳越地方と山東琅邪地方との間に海陸兩道の交通があつたことの已に疑ふ可らざるの事實なるに想到し、且つ山東と南海との間に行はれた海上交通(法顯歸航の如き)の事情等より推測すれば、北方支那に於て山東は最も早く印度文化を被るべき可能性のある地方である。而し淮水流域にすら戰國時代に於て、相當濃厚にこの文化波及の痕跡があるとすると、殆ど山

東にこの事あるを疑ふの餘地なからうと思ふ。かゝる見地に立ちて、予輩は所謂「轉附朝儻」は Jambu-dvipa の音譯でないかと思ふのである。即ち佛家の所謂鹹海中居るべき四洲の南方の一洲なる瞻部洲、閻浮提洲、剌浮洲、呬哺的發)の音譯でないかと思ふのである。こは固より人類棲息の全地を指すこともあるが、しかも狹き意味に於て單に印度の義にも用ゐらる。固より所謂「轉附朝儻」はたゞ海上の一別世界を指したものとらしく、即ち後世の海市を謂つたものであらう。「蓬萊」「瀛洲」の思想も、亦たこゝに胚胎したものと想はるゝのである。かく視ると古來支那學者の解する能はざる琅邪なる地名も之を India として容易に解釋せらるゝのである。特に「四海」といふ思想も Jambu-dvipa の思想に關連せしめて始めて明白なるを致するのである。

右は談頗る荒唐に互り、予輩と雖も、單に一説

としてこゝに之を略述するに過ぎぬ。しかも山東地方に印度文化の影響を認むるにあらずんば、齊人鄒衍等の天衍談を如何にして満足に之を解釋し得るであらうか。これ亦た一つの疑問とするの價值があらう。(大正十三年八月二十八日)

備考。

- (1) Berthold Laufer, *The Sino-Indian Language*. T'oung-Pao, Vol. xvii, 1916, p. 66.
- (2) 尙書卷一楚典、史記卷一五帝本紀帝堯及び帝舜條參考。
- (3) 史記卷一五、五帝本紀帝舜條、帝王世紀は晋臯市證の著今逸す、宋翔鳳講本あり、浮溪精舍刻本あり、指海亦た之を收む。今史記正義引くもこゝに據す。
- (4) John Crawford, *A Descriptive Dictionary of the Indian Islands* &c. p. 136. 唐段公路北戸餘臯鼻炙條に「梁州法師云、象一名伽那」とあるが、「伽那」は那伽の例が、否らざれば「那」は「耶」の誤で「伽那」は正しく「伽那」であらう。
- (5) Hobson-Jobson, *A Glossary of Anglo-Indian Colloquial words and Phrases*, p. 465. 離群孤棲の象の恐ろしく、後世ではあるが支那人にも知られ、「瀛府群玉」に「群象雖多、不_レ足_レ畏、惟獨象最可_レ畏、蓋孤象者敗群之物、不_レ容_二于群象_一、蓋無_レ所_レ發_レ故尤可_レ畏也」と見ゆ。
- (6) 上の事は同書卷三瀛會篇に見ゆ。帝王世紀には「舜葬

於、下有群象常爲之耕」とあり。これとや、趣は異なるが、Megasthenes (Frag. 21), *Arrian* (*Indian* 14) に印度の象の動物中最も伶俐なるを説き、その御者の戦死するや、之を運びて埋葬する由を傳へて居る。

(7) 太平御覽卷八九〇引くところに依る。說郭本には「多野象」の下に「牙小而紅、最堪爲勞」といふ二句がある。又た武英殿聚珍叢書本には「或云、象肉有十二種、象膽不_レ附_二肝_一、隨_二月轉在_三諸肉中_一、假如正月建寅、膽在_二虎肉上_一、餘月率同」。此例「つゞつて居り、又た「雲南家猿云々」とあるを「狗有親表、曾奉_二使雲南_一、見_二彼中家猿各家養_三象_一、負_二重致_三遠_一、若_二中夏之畜_三牛馬_一也」といつて居る。この方が原文に近いだらう。しかも此にも脱文があるやうで現に漢使云云の一節がない。

(8) *Megasth. Frag. 14* 及び *Pliny, Natural History viii* 吳都賦に「犀_二巴蛇_一出_二象路_一」といふ句がある。周より山海經から出たのである。なほ楚辭(卷一五)前漢王褒(蜀人)の作れる九懷通路章に「戰象兮上行」といふ句がある。王逸の注に「遂騎_二神獸_一、用登_二天也_一、神象白身赤頭、有_二翼能飛也_一」あり。王逸の注は明に印度思想に本づいて居るが、しかも「騎象」といふ考からが、已に印度から来たものに間違なからう。

(9) 王浮の老子化胡經につきては梁慧昺の高僧傳(卷一)皇遠の條を見よ。また唐法琳の辨正論にも晉書雜錄を引いてこの事を述べて居る。近時燉煌千佛洞に發見せられた化胡經は王浮の原本ではない様だが其大體の面影を窺ふ事は出来やう。